知事が行く！突撃取材！Part2 ～三重のひと～

第20回 ～最高のインターハイへ～

夢を結ぶ伊賀くみひもの贈り物

インタビュー詳細版

（お話いただいた方）

三重県組紐協同組合 副理事長
松島（まつしま） 俊策（しゅんさく）さん

名張高等学校2年生
（インターハイ三重県高校生活動推進委員会）
松浦（まつうら） 大治（たいじ）さん

（聞き手）
三重県知事　鈴木 英敬

松島（まつしま） 俊策（しゅんさく）さん　松浦（まつうら） 大治（たいじ）さん

知事：松島さんにお伺いします。昨年のG7伊勢志摩サミットや、大ヒットした映画の『君の名は。』で組紐（くみひも）が紹介され、国内外から伊賀くみひもに注目が集まっていますが、職人としての思いはいかがですか。

松島：昨年初めからサミットの関連で、組紐に関する問い合わせが入り始めました。また、サミットの国際メディアセンターの通路全体を、組紐で覆ってほしいという依頼があり、我々組合員が作らせていただきました。展示が始まると海外の人の目にふれる機会が多くなり問い合わせも増えました。

また、サミットに続いて昨年の夏に公開され大ヒットとなったアニメ映画『君の名は。』の影響力も大きく、今まで組紐のことを知らなかった若い人たちが映画を見て、ここ『組匠（くみ）の里（さと）』に来られるようになりました。それまでは、組紐体験で出張訪問に行ったときに「これ、何ですか」と聞かれていましたが、今ではひと目見て「『君の名は。』に出ていた組紐だ」と、若い人たちにも分かってもらえるようになり、彼らが大人になっても覚えてもらえていると考えると、本当によかったと感じております。

知事：注目が高まる中、伊賀くみひもの新しい魅力の発信に向けて力を注がれていますが、今後、どのようなことに取り組みたいと考えておられますか。

松島：そうですね。今、組紐職人の数が激減しています。組紐の知名度が上がってきた、この機会をチャンスとして捉え、若い人たちに技術を伝承し、バトンタッチしていきたいと考えています。松浦君のような

伊賀伝統伝承館「組匠の里」の館内は、組紐体験を楽しむ国内外のお客様でにぎわっていました。

若い人たちには、組紐作りに携わっていただきたいですね。

知事：なるほど。知名度が上がった今こそ、技術の伝承や人材育成をやっていきたいということですね。では、松浦さんにお聞きします。松浦さんはインターハイ三重県高校生活動推進委員として、大会の運営を支えたり選手を応援したりしておられますが、これまでに印象に残っている活動を教えていただけますか。

丸台を使った伊賀くみひものブレスレット作りを体験しました。

松浦：やっぱり、今取り組んでいる伊賀くみひものミサンガ作りです。自分で考えて、松島さんにアドバイスをもらいながら提案したものが採用され、多くの人に知らせることができました。自分が小さいころからなじみのあったものが全国から選手が集まるインターハイの記念品として使われることは、嬉しかったですし、こんな優れた伝統工芸品が伊賀にあることを知らせるよい機会になったと思います。

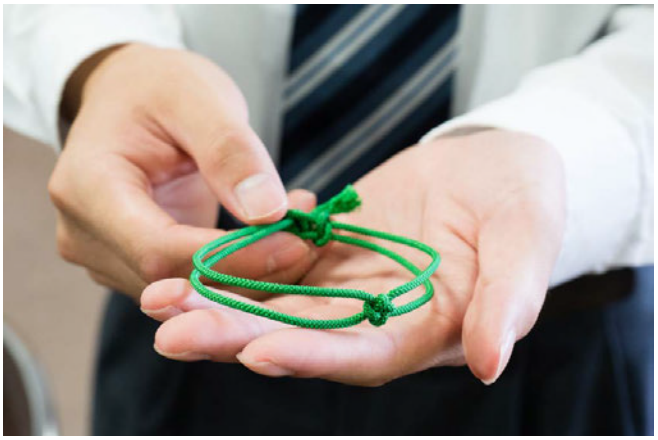
知事：伊賀くみひものミサンガを提案したきっかけは何ですか。

松浦：最初は、何か三重県の伝統工芸品を使ってインターハイの記念品を作りたいと考えていました。実は僕は小学生のころから、組紐に慣れ親しんでいたので、伊賀くみひもでストラップか何かを作れないかなと思い、松島さんに相談したところ、叶結び（かのうむすび）を教わり、記念品を決める会議でミサンガを提案しました。

知事：なるほど。それでは伊賀くみひもはもちろん、三重県ならではの魅力を生かして、来年のインターハイで全国から訪れるみなさんを、どのように迎え入れ、おもてなししたいですか。

松浦：三重県は組紐をはじめ、多くの伝統工芸品や文化があります。また、豊かな自然や、地域の人たちの人情など、全国や世界に誇れるものがたくさんあります。そういう情報をしっかり発信して、「三重県は素敵なところ」「こんなに素晴らしいインターハイができるんだ」と感じてほしいと思います。そして、「三重県に来てよかった」「インターハイが三重県で開催されてよかった」と思っていただける、おもてなしを一生懸命していきたいと思います。

「三重県に来てよかった」「インターハイが三重県で開催されてよかった」と思っていただける、おもてなしを一生懸命していきたいと話す松浦さん。



叶結びのミサンガ（試作品）。松島さんのアドバイスを受けながら松浦さんたち高校生がデザインを考案。
三重の自然を表現する緑色をメインカラーに、伊勢海老などを表す赤や、真珠などを表す白、夫婦岩の日の出などを表すオレンジを組み合わせた、2色3種類を用意するそうです。

知事：今年の夏に開催された山形県のインターハイは見に行きましたか。なかなか評判が良かったみたいですね。

松浦：はい、山形県のインターハイも行かせていただきました。山形県のもよかったですけども、三重県では、山形県や今までのインターハイを超えて、さらにいいものを作ろうという心意気で取り組んでいます。

知事：よーし、頼みますよ。最後に松島さんに、お聞きします。インターハイの成功に向けて活動に励む松浦さんをはじめ、県内の高校生のみなさんにエールをお願いします。

インターハイを盛り上げるため、私たち県内の高校生が本番に向け大会の準備やPR活動など、エネルギー全開で頑張っています！皆さん応援してください。

松島：松浦さんはじめ、高校総体活動推進委員の皆さんには、伊賀くみひもを使っていただき、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。この機会を通じて、三重県が組紐の産地であることをたくさんの方に知ってもらい、伊賀くみひものイメージをさらに向上させることで、産業としてますます発展させていきたいと考えています。

また今回、ミサンガとして使用する組紐は、我々組合員7業者の職人が組みますが、紐は結ばれてこそ完成だと思います。着物を着る時も最後に帯締めや羽織紐を結びますし、外出の時は靴ひもを結び、ネクタイやリボンを結びます。人は「さあ、これから」という時には紐を結びます。今回は、最後の“結ぶ”という大切な役割を高校生のみなさんにお願いします。我々も思いを込めて組みますので、高校生のみなさんも一生懸命、思いを込めて叶結びを結んでいただきたいと思います。

知事：なるほど。三重県の高校生や他県の高校生の思いがしっかりと結ばれ、みんなの願いが叶っていけばいいですね。今日はありがとうございました。

伊賀地域は京都、東京と並ぶ、くみひもの産地です。伊勢志摩サミットでは、メディアセンターの通路を伊賀くみひもが美しく飾ってくれました。

※インタビューの内容は、読みやすさの観点から一部要約等を行っています。
※記載内容、写真の無断転載を禁じます。
※内容に関するご意見・お問い合わせは、三重県戦略企画部広聴広報課まで

〒514-8570三重県津市広明町13
☎ 059･224･2788　FAX 059･224･2032
E-mail　koho@pref.mie.jp